説教20211003創世記2：18-24　マルコ10：2-9

「世界は一体となる」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」この創世記の一節を読んで、私たちは心躍らされ、胸がドキドキして、計り知れない喜びに満たされるのではないでしょうか。男と女が結ばれ、二人は一体となるというのは、まことの愛の実現であり、もう二人は孤独ではなくて、全世界から祝福されている、と思えるからでしょう。しかし、そうした男女の結婚の当初の高揚感は、遅かれ早かれ、実社会の大人の現実、すなわち結婚は夢物語ではなく、実際の生活なんですよ、という悟りきった声に水を指され、段々と、その大いなる喜びが失われていくのが常のように思います。

　でも、主なる神は、創世記の初めに、男と女が一体となることに、計り知れない喜びをお与えになったことは間違いのないことで、それが主なる神の人間に対する当初の計画であったのです。願わくはその計画が永遠に続いて、男と女の二人の関係が果てしなく大いなる喜びに満たされて、そしてその二者関係が、どんどんと周りに広げられて遂に、全世界が一つになることを、主なる神は当初、計画されていたのです。

　結論から申し上げますと、この神による当初の計画は、人間の罪によって頓挫しました。神によるその当初の計画は、創世記の初めの3ページに記されているだけです。そののち4ページ目で人間は食べてはいけない木の実を食べてしまい、罪を負う身となりました。このアダムとイブが犯した罪のことを原罪といって、原罪は、今の私たち一人ひとりにも及ぶことになっています。そして、その様に罪びとである私たちには、罪を犯す前の罪を知らない、あるいは、罪という名前さえ知らない無垢な人間のことは、本当には分からないことでしょう。それほど、罪びとである私たち人間と、罪人になる前の人間との間には隔たりがあるのです。

　ただ、私たちは、今、イエス様から、「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」という創世記の御言葉を、再度聞かされています。このイエス様の御言葉が橋渡しとなって、私たちは今現在も、罪がない無垢な人間と同様に、二人が一体となることの計り知れない喜びを味わえるのだと思います。　　私たちはもう少し主イエスと共に、この罪なき無垢な人間に、主なる神がどのような計画を成されていたのかを、掘り下げて見て参りたいと思います。創世記1章 27節から

神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。

と記されております。神は、ご自分の似姿として、人間を創造し、男と女に創造されました。その御計画は、当初より、男と女の二人の関係が、神によって祝福され、子供を産み、大切に養われ、そうしてその二人の関係がいしずえとなって、この地の全ての者の関係が祝されていく、ということでした。この二人の関係が全世界のいしずえとなるということ、このことに大いなる喜びを感じないで居られるでしょうか。今の私たちもその喜びを多少なりとも感じることができる心を受け継いでいます。私たちは、これからも主イエスの御言葉によって、その大いなる喜びを大切にして参りたいと願います。

　さて、この大いなる喜びに満たされた男と女の二人の関係が傷付けられたのは、人間の歴史から見れば大変早い時期でのことでした。それは一番最初の人間であるアダムが、助け手であるイブと二人で暮らし始めたエデンの園でもう起こってしまったのです。そのアダムとイブの二人の蜜月の暮らしが何日だったのか、何年だったのかは記されていませんが、ともかく人間は、一番初めの夫婦の関係において、その関係性が傷ついてしまったのです。主なる神は、自分の計画から外れてしまった人間の姿をみて、どう思われたでしょうか。主なる神は苦悩しそして悲しまれたのではないでしょうか。自分が、本当に大切に産み育てようとした人間が、自ら外れた道を歩み始め、その本当の喜びを失っていくことを、主なる神は悲しまれないはずはありません。

　その様に道を外れ、罪に生きるものとなった人間に対して、主なる神が、神の愛を告げられたのがホセア書です。主なる神はホセアに対し敢えて、「淫行の女を娶りなさい」と言われます。今の言葉でいえば、浮気をする女性と結婚しなさい、ということです。主なる神は、罪が赦される道として、清廉潔白な結婚を望まれたのではなく、自分たちの罪と向き合って、そうしてその罪をもっと大きな愛によって包み込む道を示されたのです。そうして、主なる神はご自身が、罪多きイスラエルの民を何度も何度も赦しつつ、神の大きな愛によって愛し抜かれることの一つの実現を、ホセアに勧められたのであります。

　さて今日の説教の冒頭で、実社会の大人の現実、すなわち結婚は夢物語ではなく、実際の生活なんですよ、という悟りきった声のことをお話ししましたが、確かに、このことは、結婚という制度の欠くべからざる一側面を言い表しています。創世記の初めの罪なき無垢な人間から離れてしまった今の私たち人間は、当初の神の御計画を離れ、神による結婚の祝福も、現実の社会の枠組みの中で与えられることになりました。結婚は、太古の昔から、その時代時代の社会の枠組みの中で行われ、今にまで継続されています。社会の枠組みにそくして結婚が継続してこなかったなら、人間が子供を産み育てていくこともままならなかったでありましょう。このように結婚というのは、神の前での計り知れない喜びであると同時に、人間が社会の現実に直面させられることでもあるのです。ですから、結婚観というのは社会の移ろいのよって大きく変化します。例えば、第二次世界大戦中は、いわゆる「産めよ増やせよ」という掛け声で国全体が高揚し、子だくさんの優良多子家庭はお国から表彰を受けた時代でした。その様な高揚感は今の世にはありません。このように時代の移ろいや国の方針によっても、結婚のあり方、家族のあり方は変化を余儀なくされるのです。

　さて、今日のマルコ福音書の箇所で、ファリサイ派の人々が主イエスに「夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と尋ねます。これはイエスを試そうとした質問でした。ファリサイ派の人々はこの時、申命記 24章 1節の

人が妻をめとり、その夫となってから、妻に何か恥ずべきことを見いだし、気に入らなくなったときは、離縁状を書いて彼女の手に渡し、家を去らせる。

という律法を念頭においていました。律法に通じ、当時の社会の枠組みを体現しているような彼らは、この時、妻となった女性に恥ずべきことを見出すことに、いわばゴシップネタに興ずるような、よからぬ喜びを見出していたのです。今でいえば週刊誌のゴシップに人々が興味津々で、その噂話によからぬ喜びを見出している姿であります。その様な俗世間の噂話の類のことをふられて、主イエス様は、どのように答えるのか、ファリサイ派の人々はその点に興味津々で、イエス様の答えに耳をそばだてたことでしょう。

　そうしてイエス様は、まずファリサイ派人々たちがおかれた社会にある罪について次のように指摘をされます。イエス曰く「モーセはあなたたちに何と命じたか」、ファリサイ派曰く「モーセは、離縁状を書いて離縁することを許しました」、イエス曰く「あなたたちの心が頑固なので、このような掟をモーセは書いたのだ。」心がかなくなであることは、御言葉を聞けなくなる大きな罪であります。こうして、イエス様はファリサイ派の人々のよからぬ噂話などに関わることはなく、ただ創世記の一節、「しかし、天地創造の初めから、神は人を男と女とにお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」という創世記の一節を語られたのです。

　私たちはこの創世記の御言葉を、罪なき者となることなくして、本当に味わうことは出来ないでしょう。しかし罪ある私たちは、この御言葉に大いなる喜びを見出しつつも、一方で、週刊誌のゴシップ等に良からぬ喜びを見出してしまう者であります。。

　さて、皆さん、再創造という言葉を御存知でしょうか。再び創造されるということですが、私たちは洗礼を受けて聖霊を受けて、主イエスによって再び新たに誕生させられたのです。新たに生まれ変わった私たちは、最後の時に訪れる神の国を求めて歩んでいます。今日の説教を聞いていると、ある方は、創世記の初めの罪なき無垢な人間に戻りたいと、思われるかもしれません。しかし、それは神の御計画ではないのです。私たちは初めの罪なき無垢な人間に戻ることはできません。しかし主イエスは罪ある私たち人間が罪赦されて、救われて、最後の神の国に入れられるという、新たな計画の約束をしてくださいました。その神の国の有様を思い描いてみますに、その有様は創世記の初めと似たとことが大いにあることでしょう。「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」という創世記の一節を聞かされた時、私たちが心躍らされ、胸がドキドキして、計り知れない喜びに満たされるのと同じようなことが、最後の神の国でもおこると思われるのです。神の御心が初めと終わりのどちらにあっても実現するゆえに、このように両者の有様が似通っている、ということは多くの牧者が指摘していることであります。

　私たちは結婚に関して、それを完全に聖なることとして受入れ、大いなる喜びに満たされる道と、結婚が傷つき離婚などに至ることに、よからぬ喜びを見出してしまう罪の道とを行きつ戻りつするような迷路を彷徨っています。今日のマルコ福音書の箇所の並行箇所マタイ福音書19章1節からは、マルコ福音書の後に書かれましたが、続きの会話のようなことが記されています。イエスとファリサイ派の人々との会話を聞いていた弟子たちはイエス様に言います。「夫婦の間柄がそんなものなら、妻を迎えない方がましです」この弟子たちの発言も意味深長ですが、これに対するイエス様のお応え、「だれもがこの言葉を受け入れるのではなく、恵まれた者だけである。結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい。」というイエス様のお応えも、弟子たちにとって初めて耳にするような斬新な教えにきこえたのではないでしょうか

如何でしょか、このイエス様の教えは今の私たちには、より受け入れやすい教えではないでしょうか。イエス様は、男と女の二人の関係を神聖なこととして重んじつつも、同時に、その二人の関係が世界を一つにするためのいしずえではないことを教えておられます。では、それに代わる新たないしずえとは何か、それは主イエスと私の二人の関係であります。結婚の関係は、キリストと教会の関係を現わしているとよく言われますけれども、このことも同じことを言っています。私たちはまず、主イエス様と自分との親しい交わりの関係を保ち、それを、全ての人々との関係に広げていくことが大切であります。この一週間も私たちが主イエスともにその様な生活を送っていくことが出来ますよう祈ってまいりましょう。

祈ります

天の父

あなたは、創世記の初めに、私たち人間を男と女に作り、二人が一体となることに、この上ない喜びを与えられました。今、罪を負ってこの世を歩む私たちにもその喜びが記憶されていますことに感謝し、あなたをほめたたえます。

　また、あなたは私たち一人一人に御子イエスキリストをお与えになり、共に歩む者としてくださいました。この大いなる恵みに感謝し、ますます御子を知ることが出来ますよう、恵みに恵みを受け取ることが出来るようにしてください。

　私たちは、最後に来る永遠の喜びの神の国へ向けて歩まされています。そして、その神の国が創世記の初めに似た場所であることを知らされています。私たちは、あなたが造られた罪なき場所が再び到来することを待ち望み、日々を御子と共に歩み、やがて全世界の教会が一つとなることを待ち望みます。

　フナキ・カイツウ兄　明美姉御家族がイギリスへ旅立とうとしています。どうか御家族のこれからの旅路を祝福しお守りください。世界に広がる私たちの兄弟姉妹が益々あなたの御栄えを現わしていくことが出来ますように

父と聖霊と共に